

論 文

機能的にとらえられない「意識」の性質の存在可能性

The theoretical problem of phenomenal experience having a non-functional character

妻 藤 真 彦

1. 序

意識が認知心理学系統の理論で扱われるとき、あくまで機能主義的なモデルの一要素として、処理過程に組み込まれるのが通例である。そして、そのような「意識」は「現象経験」なしにA Iにインプリメントできる (Marcel, 1988)。あるいは、むしろ「意識」を、その機能を示す下位用語で置き換えようとしていると見ることもできる (e.g., 注意; モニタリング; プラン・コマンド; 新奇手続きの生成と学習など: e.g., 妻藤, 1990)。

哲学上の問題としては、この「現象経験」にどのような位置付けあるいは意味を与えるかがテーマとなり、それなしには「知能」自体が不可能だとするものから (e.g., Searl, 1980), 「現象経験」自体の相互関連と脳の「状態」間の関係に各々「因果関係」を考える立場 (e.g., Armstrong, 1984), そして通常の精神概念を (還元して) 消去しようとする立場もある (e.g., Churchland, 1979: ただし単に脳の状態だけを考えるというのではなく、「内観的意識」を否定している訳ではない: 極めて巧妙な議論によってそれと「状態」が等価であると主張している)。その他現代版の2元論までである (Eccles & Robinson, 1984)。

認知心理学では機能主義が中心であり、Searl や Eccles のような立場の研究者は極めて少ない。歴史上行動主義は認知主義と対立していたように記述されることが多いにもかかわらず、これもある意味での機能主義であった: 例えばスキナーは「意識」を言語行動

として問題にしていた (長谷川, 1993) とするならば、現代の認知理論と (機能的コンポーネントに還元しようとする点で) 同じ立場だといってよい。

「意識」の取扱について、明確に機能主義を疑問視する主張を「認知心理学」の立場から行ったのは、おそらく Marcel (1988) が最初であろうと思われる。本稿は、この主張がどれだけの説得力を持つかを分析し、これまでの妻藤の論稿 (1990; 1991; 1992; 1993) が避けてきた問題 — 「それ」が機能主義的に還元出来るかどうか — について検討する。

2. 「現象経験」と行動の因果関係

Marcel (1988) の議論の要点は、「意識」することが行動に対して因果関係を持つということである。例えば、スポーツのイメージトレーニングが実際の身体運動の巧みさを変える、バイオフィードバックのように意識的に身体の状態を変えることができる、あるいは「自分自身が意識を持たない機械だと思っている人が、例えばリベラル等の立場をとるかどうか?」などを挙げている。そしてこのような「関係」は機能主義的な意味での因果関係ではないと結論する。前者は、「例えば、焦点的注意を向けたことによりある情報がピックアップされたので、行動が変化した」などとされる。一方、別な意味において、例えば、「そこにペンがあると信じているから、手をのぼしてとる」というとき、「そのように」信じるには、「現象経験」が必要であるのなら、そのような行動の必要条件として「意識」は因果関係を持つとされる。

不十分であると断った上で、次の例が証拠として列挙されている。まず、盲視患者 (e.g., Weiskrantz, 1988) において、刺激がアクションを誘発したり、教示で強制されたりしたときには、明らかになんらかの視覚的認知の証拠を示すが、「意識」的には見えないと本人は主張しており、かつ、強制されないときには自分から視覚能力を使っての行動は起こさないこと (つまり視覚能力はあるにも拘らず、「見えない」のでその能力に頼ることをしない)。また、重度の健忘症患者は、自伝的記憶 (エピソード記憶: 思い出) がないため、自己の感覚と人格の同一性を確立することが難しい (Baddeley & Wilson, 1986)。さらに意識された苦痛の随伴性がないと、(少なくとも人間の場合) それによる古典的条件づけが成立しない (e.g., Brewer, 1974)。この意味での因果関係を、以下では (仮に) 実存的因果関係と呼ぶことにする。

3. 実例の再解釈

ここでは明らかに古典的意味での因果関係が問題なのではない。Marcel 自身はその概念を分析してはいないにも拘らず、それを明確にしなければ、伝統的 (機能主義的) 心理学の立場との対立点がはっきりしているとはいえない。それと対立すると主張される機能的因果関係という用語自体が、古典的ではないからである。彼自身が、定義や論証ではなく具体例を挙げることによって、そのアイデアを述べている。つまり、これまでのパラダイムに収まらないものがあるということを、例示によって示そうとしているのであって、まだ、「その因果関係」を定式化できたわけではない。

例えば、「機能的因果関係がある」といっても、ある速度でコップが床に衝突した「ので」壊れたという「記述」と同種のものではない。あるプロセスがある情報を処理した結果、ある制御情報を生成し、それによってある行動が導かれたとき、そのプロセスはその行動の遂行に対してある「機能」をもっており、その情報とその行動を機能的に結び付けたから、その「機能」はその行動と (Marcel が主張する意味での) 因

果関係を持っていることになる (実際彼は焦点的注意や短期記憶を機能主義的因果関係の例として説明している)。そうだとするならば、単に「現象経験」を持つことが、例えば、視覚能力を使うことの必要条件だとしても、それだけでは、「機能」的に記述することが不当であることを論証したことにはならない。前述の「機能」的因果関係の例において、その情報が、(もし) その行動の必要条件であったなら、その情報が実存的因果関係を持つともいえるからである。

このような機能的因果関係を考えることは無意味ではない、例えば、他人から「おまえはバカだ」と言われたとき、その言葉の意味を「知らなければ」、腹を立てることにはならないであろう。このとき、「その言葉に関する意味関連 (情報) が、知識システムの中に組み込まれているならば、(それを必要条件として) 腹が立つ」と記述すれば、その情報が機能的因果関係の必要条件といえる。そして、その言葉が侮辱の言葉であることが、「現象経験」として「意識」されなければ、そのような行動は起こらないという意味で、「現象経験」と行動の因果関係を述べるとしても、それもまた、そのような機能的関連だといってもかまわないことになる。その情報が機能的因果関係をもつのであるなら、その「現象経験」も特に、実存的因果関係を持つとして、別格に扱う根拠はない。

エピソード記憶に障害を持つ人が、自己の感覚や人格の同一性を脅かされるのであれば、そしてそのことについて現象的記述を行うならば、自分が生きてきた在り方についての思い出が失われることによって、「わたしである」ということを、そうではない事柄と明確に違うこととして意識できない。機能的記述によれば、自己像スキーマ (という知識構造) が、エピソード記憶に基づいて構成されるため、その情報源を失うことによって、(自身の行動・感情のさきいきを予測するのに必要な) 自己像 (という情報: 妻藤, 1991 参照) が不明確になるとも解釈できる。そして、そのような自己同一性の「意識」が「必要」であるとしても、Marcel (1988) への反論として次のような議論もできる。つまり人間は社会的相互作用を円滑に行うため

に、他者の行動や感情についてシミュレーションを行う：さらに、それだけでは自由度が大きすぎることで、自身がどのような（感情も含めた）状態になるのかも予想しておかねばならないためそのシミュレーションに自分自身も含めたメンタルモデルを構成するとしよう（妻藤,1991）。そして、このようなメンタルモデルの出力が、モデル自体とは異なる表現（例えば「意識」表現）を取ることが必要であるとするなら、「現象経験」が必要条件であることも説明できてしまう。例えば（裏付けるデータの有無は別として）、モデル自体はその内容をリアルタイムで変更し続けているなら、ある時点での（社会的）行動を決定するために（それには時間がかかるので）、別の表現系にモニターする必要がある。もし、通常の情報処理が並列分散処理（Rumelhart, McClelland, the PDP research group, 1986）であって、しかもそれが非線型力学系の関与するようなシステムであったなら（Nicolis, 1991）、先を予想して行われる現在の（意志）決定は、そのメンタルモデルと直接は相互作用しないような別の表現系で行われないと、（意志決定によって生ずる微妙なパラメータの変化によって、不動点の位置や数が変わって）モデルのその後の振舞いが異なるものになってしまうかもしれない。もしモデルによるシミュレーションに（設定の）変更を加える必要があるときは、慎重にそれを行わねばならない。このため、その人（あるいは生物）と「環境」の相互作用が、かなり「決りきっている」状態に近ければ別であるが（妻藤, 1991）、（人間の社会生活のように）そうでない場合は、2種類の表現系が必要になるだろう。そして、そのような（機能的）必要によって発生した新しい表現系が「意識」であり、その「内容」が「現象経験」であると仮定すれば、その意味において、「現象経験」は行動に対して機能的因果関係を持つことになる。したがって Marcel (1988) の（実存的）因果関係がそのようなことではないのなら、まだ彼が述べた「必要条件」では、十分な記述とは言えないことになる。

その他に挙げられている例も同様に解釈しなおせる。「意識」が上記のような機能を果たすのであれば、盲

視患者が示すように、「見えない」とときには自分から視覚能力を使うことがないのも、その都度新しい行動を決定するのに、第2表現系が「必要」だからである。いきなり目の前に棒を突き出された場合によけるのは、そのような（意志的）決定なしに通常行なわれる行動、つまり非意識的過程による。それは紋切り型の（反射的）アクションであっても問題がない、あるいはそうでないといけな行動だからである。

また苦痛による古典的条件づけの例でも、（意識的とは限らず）「経験」される全ての害刺激を無条件刺激として、なんらかの条件反射が成立してしまうのでは、行動全体のパターンが定まらなくなる危険がある（有限オートマトンに人間のような社会生活をさせることは極めて難しいはずであるから：妻藤, 1991参照）。なんらかの形での選択が必要とされる：例えば弦楽器の初心者の場合、指先の痛みが、その楽器の音色あるいはあるメロディーなどと結び付いてしまえば、上達はほとんど不可能になってしまう：注意を集中して熱心に練習することで、痛みを意識しないから、有害な条件反射が形成されないのだとすれば、そのような「選択」は「機能的」に優れている。この点でも「意識」は機能的必要条件だということになるだろう。（ただし、好悪に関する条件づけの場合には、そのような「意識」は必要ないというデータがある：e.g., Baeyens, Eelen, & van den Bergh, 1990）。

4. 志向性

以上のように単に「現象経験」がある種の行動の必要条件であるというだけでは、それが機能的因果関係とは異なるタイプのものであることを論証できているとは思えない。ただし、前述の第2表現系が必要であるという議論でもまた、（これまでの機能的理論と同様）「現象経験」は（理論的）必然ではない。第2表現系が十分な機能を果たせば、「現象経験」はなくてもかまわないからである。

一方で、「現象経験」がなければ、論理的に言って、理解や認識はありえないという主張もある。Gulick (1988) は、Searlなどによる人工知能批判を要約した。

彼によると、批判派の哲学者が問題にしているのは結局、「現象経験」を持たない「機械」は、派生的 (derivative) 志向性でなく、かつ「みなしとしての (as if)」志向性でもないような、(本来の意味での) 志向性を持つことができないという議論である。シンボルや文などは、何かを指すという点で、「意識」と同様に志向性を持つといえる。しかしこれらは、その使用法がそれらの意味を定めており、そのことなしでは志向性を持つとはいえない。つまり言語等を使う心的状態の持主の存在を前提として成り立つので派生的とされる。またサーモスタットなどは、ある温度になると反応するという意味で、「温度を認識している」と言われることがある。しかしこれも、そのように見なす者、心的状態を持つ人間がそのように見なすのであって、本来の固有の認識をサーモスタットが持っているのではない。

このように、志向性を持つといっても、それ自身が認識の主体として「現象経験」を持つような何者かがどこかで必要になる。つまりそこにおいてそのように認識するもの、その本質的特徴として志向的でないとは考えられないような何事か、要するに「現象経験」としての「意識」がなければ、認識も知能もありえないと主張される。コンピュータが記憶し判断し認識するというのは、コンピュータの振舞いを、人がそのように見なす、あるいは、その出力をある決った使い方で使うからなのである。このように論点をまとめた後、Gulick (1988) は、そのような議論は半分正しいと主張している。「現象経験」を持つ人間が本来の志向性を持つことは明らかであるから、半分は正しい。しかし、「現象経験」を持たないシステムが、意味の理解などができないのかどうかは、また別の問題になる。

Gulickは上記の問題の機能主義的解決が可能だとする。まず、意味的自己理解は全か無ではなく、「現象経験」が必要条件であるというより、ある状況やシンボルへ向かう行動の(適切さ)に関する完全さあるいは微妙さには程度がある；またメタ意味的理解が明確に(宣言的に)表象されている必要はなく、ノウハウとして手続き的に(「意識的」でなく)、システムに埋

め込まれていてもかまわない；それ故「現象経験」は、必要条件ではなく、「機械」による認識も、そのレベルが人間と同等であるかどうかは別として、あり得る。そして、この「程度」を、彼は意味的透明度と呼ぶ；それはシステムがその意味的内容の全体をその詳細まで含めて、「見渡す」ことができる程度を意味する。このようにして、Gulickは、現象学的議論を機能主義的に解釈しなおせることを示した。ただし、「意識」の「現象経験」を認めないのではない。最も「透明」な認識は「現象経験」によるものである。

しかし、このような議論は、筆者による前述の Marcel (1988) に対する機能主義的再解釈と同様に、そのようにも考えられるという形式を持っている。言い替えると、Marcel や Searlの提示している(機能主義批判に用いられた)実例がまだ不十分であるか、あるいは決定的でないということかもしれない。

5. 自由意志を持っているという「意識」

もう一度Marcelが挙げた例を考えてみよう。「自分が意識を持たない機械だと思っている人が、例えばリベラルの立場をとるかどうか。」理論的可能性となら、それは可能である。この文の中の「人」を、政治的問題に関する談話を聞くと、リベラル派の発言をそっくり語り、行動的にもそのように振舞うようにプログラムされているロボットに置き換えよう。この機械に、自分は機械であるという情報がその知識システムに組み込まれているなら、少なくとも「見なし (as if)」として先の文を満たしている。ただ厳密に言えば、「立場をとる」という表現まで当てはまるかどうかは問題となるだろう。

このロボットは、政治的立場に関して「自由」ではない。そのようにあらかじめプログラムされているので、自分が「機械」であるかないかは最初から関連がない。そこでもう少しレベルの高いロボットを考えよう：各種の政治的立場に関する知識システムを持っており、さらに自分の行動パターンをある立場に基づいて決めることもできる。ただし、どのような立場を取るか、あらかじめ決っていない。すると、ここで初

めて、自分が「自由な存在」であるかないか、そのことについてどのような認識を持つかが、リベラルを選ぶかどうかには「影響」するだろう。しかしこの場合にも、自分が「自由意志」を持つ存在であるという「信念」を持たされておれば、それで十分であろう。機能主義の立場を取るなら、そのように議論できる。

このロボットは人間の場合とおなじように政治的立場を選んだのだろうか。論点はいつもそこに帰ってくる。このロボットが、「現象経験」を持っていない時、自分が「自由な存在」であるという（すでに植え付けられている）「信念」を「理解」しているのだろうか。古典的AIでは、この「自由」という概念が、「奴隷」というノードと否定関係でつながっていたり、また「自分自身の行為を主体的に決定する」などのネットワークと結合していたりするであろう。そしてそれらのノードがネットワークのどこかで具体的な行動を表現する何等かの表現形式を経由して、実際の行動と関係づけられている。そして Gulick (1988) の意味において、このロボットの思考は志向性を持っている（「透明度」は、また別の問題ではあるが）。つまり自分が自由な意志を持った存在であるという「信念」の意味を議論するだけでは、機能主義的解釈を逃れ切ることにはならないと思われる（それが人間と同じ意味での信念であるかどうかは問題ではない；行動との因果関係を問うならばということである）。

6. 「機能」と「行為」

このような問題の立て方で良いのだろうか。行動との因果関係を問うなら、その関係はなんらかの意味で機能的といえるのではないか。機能的という概念が、何等かの「働き」あるいは「働き合い」を考えるとときに、ほとんどの場合使用可能なものになっているのではないか。この用語上の疑問を分析する余裕がないので、むしろ Marcel が挙げた例について、これまでの（科学主義）心理学が扱ってきた対象との違いを考察する方がよいように思われる。

これまでの理論的研究は、基本的に（その気になれば）何等かの機械で実現可能な理論的コンポーネント

を仮定し、これらを組み合わせることによって、行動上のデータを「説明」しようとする（しばしば用いられる「予測」という用語を使うかどうかには慎重になる必要がある：行動の時系列が非線型力学系に従うなら、決定論モデルであっても、予測は原理的に不可能になる場合がある）。そのコンポーネントは、時には生体と環境の働き合いを表現するもの（例えば、強化、報酬、罰など）であったり、生体内のメカニズムのコンポーネント（例えば、短期記憶、注意配分、知識構造操作手続き、状態評価による原因帰属など）であったりする。前者は有限オートマトンで十分であり、後者はチューリング機械と同等であればよい。

Marcel (1988) の主張は、そのようなコンポーネントおよびその組み合わせで表現できない何かがあるということであった。彼の表現によれば、ある行為がどのように意味づけられるかによって、（振舞いとしては）同一であっても、異なる帰結を導くことがある。ある種の運動障害の患者は、例えば円筒形の物体をつまみあげるという動作はできないのに、それと同じ形のコップで水を飲むときは、ずっとスムーズにできる。さらに、自分の家で客に飲物をだすときはよりうまくやれる。このように、同一の動作がその人にどのような意味を持つのかによって、まったく違う帰結となる。

彼自身が認めるように、これを文脈効果とする説明もできる；しかしそれよりも、各々の場面での円筒を持ち上げるという動作が、それぞれ（その患者の生活において）異なる「行為」だと解釈する方が単純だとされる。この事例は、今まで検討してきた例以上に、古典的機能主義者の攻撃を避けられそうもない。それでも、ここには（Marcel とは異なるかもしれないが）、後述のように、もう少し検討を続けてみる価値がある。

7. 「現象経験」と「生きられる世界」

Yates (1985) は、（機能主義的なパラダイムを維持したまま）これまでの認知理論の多くについて批判を行っている。彼の主張は次のようなものである：訓練によって自動化した行動は「意識」が関与するコントロールの下にはないので、その正確さや反応時間は

プロセスの性質を表しているが、そうではない行動は、すべて「意識」が関与して起こるものであり、プロセスの性質を直接に表すものではない。例えば、数字列あるいはアルファベット列から「0」を検出する課題において、それを「オー」と読んでいる被験者は文字列よりも数字列での検索時間が短く、逆に「ゼロ」と読んでいる被験者は文字列の方が短かった。妨害項目数の効果も、「オー」の読みと妨害項目の読みが同じカテゴリのときのみ現れた (Jonides & Gleitman, 1972)。この実験についてYatesは、このような判断が物理的特徴に基づいて行われるのではなく、「用途」、「意味」、「機能」、「他との関係」に関わる「もの (object)」について為されると解釈した。この「もの」とは、「意識」の「内容」のひとつとされる (他には、出来事、事態)。このように、自動化されていない行動は、「意識」された内容に対してなされるのであって、反応時間なども、どのように意識されたかによって異なる法則を示すことになる。

Yatesの「意識」はあくまで機能的に定義される (いわば) 第2表現系であるから (これも機能的に一種の装置と見なすこともできるので)、これと行動の関係は、Marcelのいうもう一つの因果関係ではない。しかし、このように心理データと「意識」の関係を捉える仮説が正しいと仮定すると、次のように、(これまでの認知理論とは異なる考え方による) 理論の可能性がないとはいえなくなる。

前述のように、特定の行動や能力を説明するために、機能的コンポーネントを仮定し、その働き合いを導くのが理論的研究であった。行動主義も基本的にこの線から外れているわけではない。ゲシュタルト学派の場合も、「意識」現象を扱っているとはいっても、そこに「現象経験」から離れた法則や原理を仮定する点で、やはりある意味での機能的コンポーネントを考える点では同じと見ることが出来る (例えば、プレグナンツの法則は、それに従って視覚刺激を意識しているその本人が、自分はプレグナンツの法則に従うように視野を体制化していると「思っている」わけではない)。

ある人Aが、そこに生きている「現実」を考えてみ

よう。その人は自分の「行為」が正しいと考えているが、他の人Bからみればバカげている；そしてそれによってAは周囲の人の一部を苦しめており、Bから見るとAの「行動」は、単に自分のプライドを護るために必死になっているだけのように見える。もしBの「解釈」が正しいければ、Aは無意識的な動機に動かされていることになる。ただし、それを「科学的」パラダイムの下で「証拠だてる」ことが可能かどうかはここでは問わない (臨床的には、Aがその「解釈」を受け入れることで何等かの変化があれば成功とされるであろうし、また「正しい」かどうかは問題にできないという立場が最も合理的と思われるが、ここでは単に理論的可能性として「正しい」という語を使う)。もしこのような事例が実際にあれば、そこで起こっていることの「因果関係」は「現象経験」の中だけでは完結しない。しかし、まだ次のような議論が可能である。

Marcel(1988)はフロイトなどの言う無意識は、結局「意識」内容と同質の構造を持っているとして (実際、同系統の用語で記述される)、このように抑圧された「意識」内容のみを「無意識」と呼ぶことを提案している。一方「意識」されない情報処理過程 (プライミング、記憶検索、情報の干渉など、「意識」内容や「無意識」とは異なる種類の用語で記述されるもの) を「非意識」とする。この用語法を使うことで、今の事例の見通しがよくなる。つまり、「意識」と「無意識」を合わせたものの記述は、「非意識」的な (つまり機能主義的に理論化される) 「過程」とは異なる性格を持っている。このとき前者に関連して記述される外的「振舞い」は「行為」であり、後者の場合は「行動」となる。「行為」は社会的意味の文脈で述べられる「振舞い」である。もしこの2分法について、各々の中だけで因果関係の記述が成立し、かつ各々異なるタイプの記述が (どうしても) 「必要」なのであれば、Marcel(1988)が主張する (実存的) 因果関係が機能的因果関係とは別に考えられるべきであろう。

先の例において、Aの「現実」は、Bの「解釈」を受け入れないかぎり、その他の人と (その意味で) くい違っているといつてよいのだろうか。そのように考

えると、一人一人がそれぞれ（自分の思い込みによって構成した）異なる「現実」に生きていることになる。しかしAの「現象経験」において、彼は彼の「現実」に生きているつもりであっても、少なくともBのように（他人を「解釈」するクセのある）他者が存在するならば、自分の「現実」の中に何等かの違和感を作り出す人があるということは（少なくともAが低すぎない対人認識力を持っておれば）「意識」されることになるであろう。そのような場合、「無意識」と呼ばれる領域にある事柄も、「現象経験」の中に「ない」とはいえない。

Bによって、「あなたがそのようにした理由はなにか」などと尋ね続けられ、その時突然その場から逃げ出そうとしたとしよう：自分のそのような「行為」について（少なくとも）一瞬違和感を感じたならば（つまり、自分の当該の「行為」が正しいと思っているなら、Bは尋ねているだけなのだから、ただ単に答えるか、それには答えられないと述べるだけでよいのに、自分がそれとは異なる「行為」を選択したということに気づいたなら）、この意味において「無意識」は「現実」の構成に関与している。もちろん、「意識」的に自分自身に対して行う「説明」（原因帰属、あるいは合理化）は、相手が失礼であったからとか、立場上答えられなかったからなどということになるであろう（しかし、いきなり話を打ち切って立ち去るのではなく、これには立場上答えられないと告げるなどという場面の切り替方、あるいは打ち切りの方が「常識的」であるということに、明確であるかどうかは別として、気づく可能性は常にある）。もっとも、実際的には「気づかない」ことの方が多いかもしれない；というよりその人の原因帰属パターンに大きく依存するのは、ほぼ確実であるが、ここで問題にしているのは、「意識」と「無意識」が、「現象経験」についても完全に切り放されたものではないということである。

しばしば行動に対して「無意識」的内容が影響しているのに、本人はそれを「意識」していないという実験が報告される（e.g., Erdelyi, 1985）。しかし、例えば「意識」は平静であるのに、手に発汗があったり、

なぜかその場にいることがイヤになったなら、そのことが「意識」に違和感を感じさせる可能性は常にある。これも「無意識」が「意識」的「現実」に参加するもう一つの可能性である。分離脳の患者において、言語能のない視野に与えられた刺激が（右半球に支配されている側の）顔のゆがみをつくりだすと（それは反対側の顔の緊張状態にも影響するので）、それを他方の半球が認知しそれによって、ある雰囲気を感じるという言語報告がなされる（Gazzaniga, 1985）。このような意味において可能性があるなら、「意識」と「無意識」は、どちらもその人の「現実」を構成する要因だといってよいのではないか。

実際、抑圧されているわけではないある記憶が、文脈の関係で再生しにくい場合もある（e.g., Godden & Baddeley, 1975）；つまり今ここでの「現実」とは「意識」可能なあらゆる情報が「現象経験」にあらわれているわけではなく、それらは（いわば）現象の地平を、あるいは風景の（そこが空虚ではないと分かっている）見えない部分を形成している。そこで「無意識」に属することがらも、それが何等かの形で「意識」の背景を変える可能性を持つならば、同様にその人の生きられる「現実」に参加しているといつてよい。また「無意識」的原因によって生じる不適応がある場合、その帰結は「現実」であるから、この場合については議論の必要もない。そこで、少なくとも、精神分析や分析心理学の主張が実証的に否定されていないのであれば、上記のような意味において、心的内容同士の関係と働き合いの集合だけを考えても、そこに閉じた「因果関係」を見いだす可能性もあるということになる（ここで問題にしている「因果関係」は、Armstrong, 1984, が主張しているような、脳の中での因果関係と、「意識」の中での因果関係の区別とは異なる。機能的因果関係は脳の神経系の働きと等価ではない。ここで扱っているものはどちらも心理学的な関係であり、脳との関連はまた全く別の考察を必要とする）。さらに、このような因果関係が妥当であるのなら、Gulick (1988) による、Searlへの批判は（後者が半分正しいのと同様に）半分だけ正しいということにな

るだろう。低いレベルの志向性はあるとしても、単にその極限として人間の「意識」の志向生があるのではない。創発特性として「現象経験」の中での因果関係を持ち得るのであれば、(Gulickの論法をそのまま使えば)その中だけで「意味」が成立するはずだからである。自分自身の死は、それが生物学的に起こったときには、もはや自身の「現象経験」にとっての意味はない；その可能性が認識され、少なくとも「現象経験」の背景に置かれたとき、自殺を除く死はオペラント「行動」でも反射でもないのだから、将来の死という「行動」がその「意識」の意味を与えるのではない。この点でGulickのこのような「行動」との関連で志向性を考え、またその極限を考えるだけでは不十分だと思われる。死の直前の苦痛がある恐怖を与えるのだとしても、死の概念はそこにあるのではなくて、むしろ自分自身の「現象経験」が消滅するという、そのことにおいて意味を持つはずである。

ただし、以下で述べるように、ここで精神分析等の擁護を行っているわけではない。もっともここで「精神分析等」という言葉は、「無意識」と「行為」も含む心的内容同士の「関係」のみの分析によって、その特定の人を理解できるという立場だとしておく；おそらく異論が出るとは思われるが、ここでいう「関係」とは社会的意味も含んでおり、人間関係もここでいう「現象経験」との関連で含まれている；これらに共通するのは、説明や解釈にあたって「機能」的コンポーネント（検索、知識ネットワーク、注意資源配分、原因帰属パターンなど）を参照しない立場をいう。

（実存的）因果関係がこの意味だとしても、「精神分析等」が、そのまま「心理学」と等価にならない理由として、まず指摘すべきことは、全てにわたってそのような（「行為」を含む）心的内容間の「因果関係」が閉じていることはないということである。例えば、長期記憶の検索速度や、それを維持する注意資源配分が不適当であるような人は、その人の「現象経験」に参加する内容の性質（例えば高いプライドに過度にこだわるなど）とは無関係に、一般的に社会的判断のたよりを示すであろう。常に（その場には不適切であ

るような）正論を述べる人も、その人のコンプレックス等を詮索する前に、知識システムの検索の偏りとその知識システムや長期記憶に保存されている情報の幅を考慮すべきである。

このように、心的内容同士の相互作用等による因果関係だけでは、その人の（例えば）問題行動を理解できるとは限らない（機能的な制約は当然入ってくるから）。それだけではなく、ある心的内容が「原因」となって、ある「行為」が生じたのだとしても、その人がそのようなことをする傾向が強くなった理由は、心的内容の分析からでは説明できない。なぜなら、そのような傾向が生じたのは、生得的傾向あるいはそのように学習された傾向であるが、それが獲得された経緯自体は「機能的」だからである。もし一般的に他人に対して常に疑い深い人がおり、かつ生育史において裏切られた経験が多かったとしても、それが「現象経験」における「原因」である場合ですら、機能的にはそれだけでは説明になっていない。そのような経験が、そのような形で、知識システムや手続き的知識の集合に組み込まれた「機能的な原因」は、また全く別の分析を必要とする。同じ経験が、人によって全く別の結果を生むことは十分にあり得る（バターを溶かすのと同じ火が卵を固める：Allport, 1961）。ここで関係する要因は、心的内容だけではない。もし抑圧された何等かの心的外傷体験があるとき、そのような傾向を学習しやすいのだとしても、それだけでは十分条件にはならない。出来事の社会的意味を認知する能力はどの程度であったか。またその認知から、先を予想するとき知識システムが当然参照される；その時点ですでにどのような知識を獲得していたか：周囲の大人の振舞いを見て、ホンネとタテマエについてあるいは基本的道徳観について、何を「どのように」学習したのか；「思想」に感情を動かされる程度など。これらについて、認知能力と偏り（クセ）、メタ認知能力、長期記憶の検索傾向、選択的注意システムの傾向（分析的か総合的か）、それによる選択的学習の傾向、原因帰属の傾向と感情の関連などは、心的内容の問題ではなく、機能的な意味での「過程」の性質である（脳の器質障害

などについては、議論の必要もないであろう)。そしてこのような意味で、ここでの(実存的)因果関係の議論は「精神分析等」の擁護論ではない。

このように2種類の「因果関係」を考えるのであれば、意味があるように思われる。ただし、「無意識」も含む心的内容の関連が、実際に閉じた因果関係を持つ場合が(厳密に)あるかどうかは、何等かのデータを必要とするが、少なくとも精神分析系統の心理学や文学の印象批評パラダイムが(それら自体を認めない人がいるとしても)それ自体の一貫性をもって存在することは事実であり、その事実は心的内容についてある構造と相互作用を「語る」ことが可能だという証拠ではある。ユングの著作には論理的整合性がないとも言われるが(入江, 1992, p.112), ここで述べている一貫性とは、理論的な内容ではなく、そのように「語る」ことが、「聴く」人にある種の体系として「了解」されるという意味である。

9. 要約と結論

Marcel (1988) の非機能主義的因果関係の提案について、それがまだ明確な概念として定式化できておらず、機能主義的な理論も非線型システム概念を取り入れることによって、彼の批判を吸収できることが示された。また反機能主義的哲学による志向性概念の議論についてGulick (1988) による反論が要約され、結局機能主義から十分離陸できていないと結論された。その後、こんどは逆に心的内容の間の「因果関係」について、思考実験による考察が行われ、前述の議論とは異なる方向から、「現実」の「現象経験」に、いわゆる抑圧された心的内容も、ある形で関わるとすれば、その意味での心的内容同士の関係が閉じた因果関係を持つ可能性が十分にあると結論された。ただしすべてのそのような関係が閉じているのではなく、機能的分析も必要になる場合があることも論じられた。この意味で2種の因果関係を考えるのであれば、志向性についての論争も、心理学上は哲学に悩まされる必要がなくなるかもしれない。また、ここでは十分な議論にはなっていないが、自分自身の死について、その認識

における志向性の分析は(基礎心理学的にも臨床的にも)「現象経験」を理論化するにあたって必要であろうと思われる。

引用文献

- Allport, G. W. (1961) *Pattern and growth in personality*. New York: Holt, Rinehart and Winston. (和訳今田恵, 「人格心理学」, 1968, 誠信書房)
- Armstrong, D.M. (1984) *Consciousness and causality*. In D.M. Armstrong & N. Malcolm (Authers), *Consciousness and causality: A debate on the nature of mind*. Basil Blackwell, 1984 (和訳黒崎宏, 「意識と因果性」, 1986, 産業図書).
- Baddeley, A.D., & Wilson, B. (1986) *Amnesia, autobiographical memory and confabulation*. In D.C. Rubin (Ed), *Autobiographical memory* (pp. 225-252). Cambridge University Press.
- Baeyens, F., Eelen, P., & van den Bergh, O. (1990) *Contingency awareness in evaluative conditioning: A case for unaware affective-evaluative learning*. *Cognition and Emotion*, 4, 3-18.
- Brewer, W.F. (1974) *There is no convincing evidence for operant or classical conditioning in adult humans*. In W.B. Weimer, & D.S. Palermo (Eds), *Cognition and the symbolic processes* (pp. 1-42). Erlbaum, Hillsdale, NJ.
- Churchland, P.M. (1979) *Scientific realism and the plasticity of mind*. Cambridge University Press. (和訳村上陽一郎, 信原幸弘, & 小林伝司, 「心の可塑性と実在論」, 1986, 紀伊国屋書店).
- Eccles, J.C., & Robinson, D.N. (1984) *The wonder of being human: our brain and our mind*. The Free Press, A Division of Macmillan, Inc. (和訳大村裕, 山河宏, & 雨宮一郎, 「心は脳を越える」1989, 紀伊国屋書店).
- Erdelyi, M.H. (1985) *Psychoanalysis: Freud's cognitive psychology*. New York: Freeman and Company.
- Gazzaniga, M.S. (1985) *The social brain*. New York: Basic Book Inc. (和訳杉下守弘, & 関啓子, 「社会的脳」, 1987, 青土社)
- Goden, D.R., & Baddeley, A.D. (1975) *Context dependent memory in two natural environments: On land and underwater*. *British Journal of Psycho-*

- logy, 66, 325-331.
- Gulick, R.van. (1988) Consciousness, intrinsic intentionality, and self-understanding machine. In A.J.Marcel & E.Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp.78-100). Oxford : Clarendon Press.
- 長谷川芳典 (1993) スキナー以後の行動分析学 : 2. 心理学の入門段階で生じる行動分析学への誤解。岡山大学文学部紀要, 19, 45-58。
- 入江良平 (1992) ユング心理学とグノーシス。現代思想, 20-2, 105-119。
- Jonides, J., & Gleitman, H. (1976) The benefit of categorization in visual search: Target location without identification. *Perception & Psychophysics*, 20, 289-298.
- Marcel, A.J. (1988) Phenomenal experience and functionalism. In A.J.Marcel & E.Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp.42-77). Oxford : Clarendon Press.
- Nicholis, J.S. (1991) *Chaos and information processing: A heuristic outline*. World Scientific Publishing, Singapore.
- Rumelhart, D.E., McClelland, J.L., & the PDP research group. (1986) *Parallel distributed processing : Explorations in the microstructures of cognition, Vol.1 : Foundation*. Cambridge : The MIT Press.
- 妻藤真彦 (1990) 認知心理学における「意識」と「測定」。In 大阪市立大学文学部心理学教室四十年のあゆみ (pp. 564-576)。大阪市立大学文学部心理学教室。
- 妻藤真彦 (1991) 認知理論における「自己像」の機能的役割。美作女子大学・同短大部紀要, 36, 1-10。
- 妻藤真彦 (1992) 「意識」概念の心理学的再構成 : コウモリではなく人間であるとはいかなることか。美作女子大学・同短大部紀要, 37, 1-10。
- 妻藤真彦 (1993) 根拠を述べることができない確信と「意識様態」。美作女子大学・同短大部紀要, 38, 1-10。
- Searl, J.R. (1980) Minds, brains, and programs. In *The behavioral and brain sciences, Vol.3*, Cambridge University Press, reprinted in D.R. Hofstadter and D.C. Dennett(Eds), *The mind's I*. Basic Books Inc., Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middx. 1981.
- Weiskrantz, L. (1988) Some contributions of neuropsychology of vision and memory to the problem of consciousness. In A.J. Marcel & E. Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp. 183-199). Oxford : Clarendon Press.
- Yates, J. (1985) The content of awareness is a model of the world. *Psychological Review*, 92, 249-284.

(1993年12月1日 受理)